IN THE FRIDGE

髙橋　佑

あらすじ

楽天的な青年、悠司。彼の部屋に置かれた小さな冷蔵庫。それは中に入れた物を2か月前に送ることができる代物だった。冷蔵庫をうまく使って生活を送る悠司だったがある日、人間の指、血のついた札束、一枚のメモが送られてくる。危険な金だと感づいていながらも使い込み、娯楽にふける悠司だったが…。

アピールポイント

先の読めないストーリー展開と、主人公の青年の魅力的な人物像を意識して書きました。

本編　４１６７文字

○悠司の部屋

呆然と、部屋の中央の冷蔵庫にもたれかかって床に座っている、金髪の青年・悠司（２５）。

体に血を浴びている。

悠司の声「未来のことは分らない。だから今を精いっぱい生よう。ってほんとに皆が言うじゃないですか。映画とか小説とかで」

血まみれの床に、本棚は倒れ、包丁などの調理器具が散らかっている。

悠司の声「俺もそういうフレーズ大好きで、だってまったくもって正しい、世界の真実じゃないですか」

悠司、床に落ちたタバコの箱から一本取り出し、火をつける。

悠司の声「ただ、ひとつ、２０年そこそこしか生きていない俺が言うのもちょっと恐れ多いんですが、赤ペンで書き足したいなって最近思って。ちょっとした経験をしたからなんですけど」

悠司、煙を吐き出すと、立ち上がり、その場を離れる。

悠司の声「たまげますよ」

血まみれの冷蔵庫。

○タイトル『IN THE FRIDGE』

○悠司の部屋

冷蔵庫のドアが開く。

黒髪の悠司。

冷蔵庫の中身を確認するが、ほとんど空だ。

白い冷蔵庫を閉める。一人暮らし用の９０ℓ程の２ドアタイプだ。

悠司「内見ぐらいはちゃんとしとくんだったよなあ。腹減った」

と、つぶやき、冷蔵庫の前を離れる。

「カタン」と、物音が冷蔵庫から鳴る。

悠司、立ち止まり、冷蔵庫の前へ戻る。
開くと、紙の皿に盛られたカレーが入っている。
悠司「……気が利くじゃない」
と、カレーの皿を取り出す。
悠司の声「今起こったことは、そう難しいことじゃないんすよ」
悠司、カレーにラップを掛け、電子レンジに入れる。
悠司の声「2か月後の未来の俺がカレーを冷蔵庫に入れて」
電子レンジの「チン」の音。
悠司「うまそー」
カレーを両手に持っている悠司。
悠司の声「それがここにあるってだけっすね」
× ×
カレーを食べ進める悠司の右手。その横、散らかった机には国民年金の督促状のピンク色の封筒、ガス料金の払込票が乱雑に置かれている。
悠司の声「これは俺調べなんすけど、冷蔵庫自体は普通で、部屋の」
冷蔵庫が置かれた部屋の隅。
悠司の声「ここに設置するとなんかバグって過去と繋がるってわけっす。一方通行ですけど」
机には「市役所行く！明日！本当に！」と書かれたメモ。
悠司の声「便利そうでしょ」

○同　外観（夜）
悠司の声「まずデメリットから説明しますね」

○同　室内（夜）
悠司、弁当屋で買った弁当を食べている。
外された蓋には『特盛り』と書かれ

たシールが貼られている。
悠司「ふう」
と、満腹になった様子の悠司。
悠司、冷蔵庫の前に立ち尽くす。
悠司の声「普通に冷蔵庫使えないです」
冷蔵庫に食べかけの弁当を入れる。
悠司の声「なんで２か月前の俺に押し付けます。喜ぶでしょ多分」
悠司、冷蔵庫のドアを閉める。
悠司の声「デメリットはほんとこれぐらいかもっすね。で、いいことたくさん」

○同
冷蔵庫が開く。
悠司、冷蔵庫から一枚の紙を取り出す。
メモには『志田さん　落語が好きだいぶグイグイいっていいかも』と書かれている。

○書店
エプロンを付けた悠司、同僚の女性・志田（２４）と話している。
楽しそうにうなづく志田。

○演芸場
落語を見て笑う悠司と志田。

○歩道橋（夕方）
熱心に志田に何かを伝えている悠司。
志田、照れくさそうにうなづく。

○商店街（夜）
手を繋いで歩く悠司と志田。
悠司の声「もちろんこういうこともしましたよ。……未来が変わるとか、そういう理屈っぽい文句は受け付けてないすよ。俺は今を生きてるんで」
悠司、にやつく。
冷蔵庫が開く音。

○悠司の部屋

一点を見つめる悠司。

視線の先、冷蔵庫の中には一万円札の束が２つ。血がついている。

取り出し、ぱらぱらと確認してみる。

冷蔵庫の奥に何かを見つけ、手を伸ばす。

小さな棒状のものを取り出す。

人間の手の指だ。

悠司、驚いて指を急いで冷蔵庫に戻す。

と、何かに気づく。

冷蔵庫の中から小さいメモ用紙を拾い上げる。

内容を確認し、怪訝な表情。

メモをポケットに突っ込み、札束を見つめる悠司。

悠司の声「さすがの俺にもわかりましたね。絶対やばい金だって。そっとしとくべきだって」

悠司、冷蔵庫を閉める。

×　×

冷蔵庫が開く。

ホールケーキを片手に持った悠司。

金髪になっている。

そのままフォークで大きく一口を頬張り、半分ほどになったケーキを冷蔵庫に入れ、閉める。

口の周りにクリームをつけて幸せそうな笑みを浮かべる悠司。

机に向かう。

机周りには積み上げられたゲームソフトやピザの箱、シャンパンの瓶など、贅沢の痕跡が散乱している。新しく置かれたテレビには、昼のバラエティー番組が流れている。

ゲーム機を起動し、タバコに火をつける。

悠司の声「やばかったら未来の俺に任せ

ます。そうやって生きてきたんで。第一未来の俺がヤバそうなのを俺に押し付けて来たんでおあいこでしょ。未来の俺の検討を祈ります。」

悠司、煙を吐き出す。

○悠司の部屋

テロップ「二か月後」

恐怖に顔をこわばらせている悠司。

「どん、どん」と、低い、こもった衝撃音が鳴り続けている。

音に合わせて、不規則に震える冷蔵庫。

キッチンから包丁を手に取り、冷蔵庫の前で構える悠司。

冷蔵庫にゆっくり近づいていく。

左手で冷蔵庫の扉をゆっくり、半分程開く。

冷蔵庫の中身を覗く悠司。

悠司「……」

冷蔵庫の中を、暗い緑色をした肉塊のようなものがぎっしり詰まっている。

悠司、眉を寄せる。

肉塊が自ら向きを変え、鋭く、青い牙を見せ、悠司に向かって飛び出す。

冷蔵庫のドアが悠司の左手にぶつかり、包丁が落ちる。

尻もちをつく悠司。

その肉塊・生物の体が腹の辺りで冷蔵庫に引っ掛かり、身動きがとれなくなっている。

悠司「ホアアー！」

と、悲鳴を上げながら、生物の頭に何度もチョップを浴びせる。

生物、冷蔵庫から肉を削り赤黒い血を流しながらながら、右腕を無理やり引っ張り出す。

悠司、急いでキッチンからフライパンを持ってきて、生物の頭に何度も

叩きつける。
もがく生物。一緒に冷蔵庫が少し動く。
生物の左手が抜ける。
悠司、驚いて距離を取る。
生物、甲高い叫び声を上げ、前方に飛び出す。
ガタガタと音を立てて冷蔵庫を引きずりながら、悠司に襲い掛かる生物。
悠司、フライパンで爪を防ぎ、床の衣類を投げつけて抵抗し、なんとか生物の攻撃をしのいでいく。
モニターやコントローラーをぶちまけて机を倒し、陰に隠れる。
床に落ちたテレビがつき、音楽番組が流れ出す。ロックバンドが軽快な音楽を演奏中だ。
机に強い衝撃。
机の天板を支える悠司の右手ごと生物が上から机に噛みつく。
悠司「っ！ってえ！」
と、右手を引っ込める。
第二関節までなくなっている中指。
悠司、痛みと衝撃にじっと耐える。
と、なくなった中指分の隙間から、床に落ちたメモが見える。
メモには「シャンパン、いけます」と大きく書かれている。
床に転がったシャンパンの瓶に目をやる。
右手にフライパンを掴み、瓶に向かって飛び出す。
瓶を左手に掴む。
悠司に突進する生物。
悠司、瓶をフライパンに叩きつけて瓶を割り、構える。
ぶちまけられるシャンパン。
迫る生物。
悠司、向かってくる生物にめがけて割れた瓶を突く。

瓶が生物の口からのどに突き刺さり、生物が叫びを上げる。
悠司、瓶のコルクをめがけてフライパンを力いっぱい叩きつける。
瓶が生物の後頭部から突き出る。
生物、苦しみながら後ろに倒れる。
痙攣する生物から血が噴き出し、突き刺さった瓶の半分に血がたまっていく。
悠司、右手を押さえながらふらふらと立ち上がる。
瓶のコルクが飛び、瓶の口から生物の血が溢れ出す。
悠司「……」
と、生物の死体を見つめる。
悠司、三分の一になった中指を立てる。
悠司「……」
轟く銃声。
玄関が蹴破られる。
真っ黒なレインコートのような服で全身を覆い、銃を持った、奇妙な形のガスマスクをした五人組が入ってくる。
黒服の二人が悠司の前に立ち、その一人がメモ帳とペンを取り出す。
その後ろで、一人が生物の死体を調べ、二人が黒く、つやのある袋を広げている。
黒服1「これをやったご本人様、でいいですかね」
悠司「え、ああ、はあ」
3人の黒服が冷蔵庫から生物の死体を引っ張り出している。
黒服1「そうですか」
と、コートの内ポケットから一万円の束を二つ取り出し、
黒服1「どぞ」
と、悠司に手渡す。
黒服2「え、報酬すか。いいんでしたっ

け、この人、えっと……」
と、スマホを取り出す。
黒服２「二ヶ月前ですけど」
黒服１「確かよかったはず」
黒服、他三人の黒服に目を向ける。
黒服１「あ、終わった？」
黒服の一人、死体の入った黒い袋のチャックを閉め、うなづく。
黒服１「よし、撤収。次」
黒服２「俺知らないっすよ」
五人組が袋を持って出ていく。
悠司、脱力し、冷蔵庫にもたれて床に座る。
冷蔵庫の中に中指が入ったままドアが閉まる。
悠司「……」
と割れたシャンパンの瓶の破片に目をやる。
床のメモに目をやる悠司。
握った札束を見る。
瓶を見る。
悠司「……ラッキー」
と、札束をポケットにしまう。
玄関の外からあわただしい足音。
黒服２の声「やっぱ違うじゃないですか」
黒服１の声「一週間でマニュアル全部覚えられるわけないだろ。とりあえず返してもらうぞ」
悠司「……！」
勢いよく玄関が開く。
黒服１「さっきの、報酬金、返してもらっていいすか！」
悠司「なんかゲームとか買ったらなくなりましたわ」
と、へらへら。
黒服１「（舌打ち）おい探せ！」
黒服２「あはい！」
黒服二人が騒ぎながら部屋を引っ掻き回す中、座っている悠司。
悠司の声「取られるぐらいならね、そり

ゃプレゼントにするほうがね」
黒服１の声「あーもういいや！時間ない、次」
黒服２の声「俺もう仕事やめたいっす」
玄関が開き、閉まる音。
悠司の声「……結局おれが赤ペンで何を書きたいかというと」
悠司、タバコに火を点ける。
悠司の声「未来のことが分かんないから今を生きろってのは、ちょっと弱気に聞こえてしょうがなくて。」
悠司の後ろで流れているテレビの画面が切り替わる。
悠司の声「今を生きろってのは当然なんすよ。ほんと、何が起きても絶対変わんない常識ですよ常識。健康でも死にかけでも、若くてもジジババでも」
タバコを深く吸う。
悠司の後ろで流れているテレビの画面が、情報番組に切り替わる。
アナウンサーの声「きょう未明、アメリカ、カリフォルニア州ヴァレーホに落下した隕石について、アメリカ政府から……」
悠司の声「あ、未来分かっててもっすよ」と、にやついて、煙を吐き出す。